



旭川文学資料友の会  
**友の会通信**  
 第23号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会  
 〒070-0044  
 旭川市常磐公園 旭川市常磐館内  
 電話 0166-22-3334  
 印刷・株式会社あいわプリント

## 新年度に向けて

会長 十河 宣洋

会員の皆様には平素から、大変お世話になっております。

昨年は、八月石山宗晏副会長、十月相川正志元会長、十二月菅野浩会長と、この会を創設以来支えてこられた方々がお亡くなりになりました。

その後、会長に選任されました。宜しくお願いたします。

平成三十一年(令和元年)度総会についてご報告いたします。

現在会員は、一七九名。総会出席者二四名。委任状一〇三名。で、総会は行われました。

### 平成三十年事業報告

#### 「旭川文学資料館」

企画展は「教科書の中の文学者たち」「旭川詩人クラブ詩画展」「旭山動物園の五〇年展」を実施しました。特に「旭山動物園の五〇年展」では、来館者が千名となりました。

来館者では、旭川市シニア大学生が資料館の見学に訪れました。

更に、小熊秀雄賞受賞者の山田亮太氏、児童文学研究者の佐藤将寛氏、立命館大学の島田龍氏、井上靖ご子息井上修一氏、斎藤史のご子息など多数の方が来館されています。また札幌の平岡中学校二年生がグループ研修で来館されました。

来館者総数二七六〇名とカウントしています。

#### 「井上靖記念館」

企画展は「井上靖―愛蔵品展」「井上靖人と文学区―『風濤』執筆のころ」「井上靖と登山」「井上靖「海峡」展」の計四回実施。

関連事業として、「井上靖講座」四回。文学散歩。夏休みお話し会。講演会、文学講座、朗読会、ロビーコンサート等を実施しました。

「青少年エッセイコンクール」には全国から中学生四五九編、高校生二二二編の応募がありました。

#### 令和元年度の事業計画は

「旭川文学資料館」「八匠衆一展」「第三十三回旭川詩人クラブ詩画展」「歌誌『かざろひ』六五周年記念展」などを予定しています。

交流室等を使って、各サークル活動が行われています。第一火曜、詩人クラブ。第一土曜、五行歌。第二金曜、俳句大学。第二土曜、歌集を読む会。第四土曜、俳句「群の会」等です。

#### 「井上靖記念館」

「井上靖蔵書展」「人と文学「おろしや国酔夢譚執筆の頃」「井上靖の短編小説」「教科書に載った井上靖の作品」等の展示会の他、文学講演会、コンサート、朗読会等を予定しています。青少年エッセイコンクールの実施などを予定しています。

以上簡単ですが報告いたします。

## 来館者ノートから

### 「旭川動物園の五十年展」の感想

動物園が大好きで、年に十回ほど通っている。昔のポスターやパンフレット等とても興味深かったです。このような機会でもないと見ることができないので。

先日の坂東園長の講演会も聞きに来ました。園長が用意されたスライドがまだあったので、もつと聞きたかったです。四月あたりにもう一度動物園の方に来ていただいて話を聞くという機会があるとうれしいです!!

(2・22)

坂東元さんの「動物と向きあつていきる」を読みました。坂東さんはお子さんの時代、転校をくり返していたのですね。私も転勤のある夫と結婚して、地元を離れ旭川に暮らしています。その前の土地でも「よそから来た人」と思われることはありません。

でもそう思わない人もいますので、深く考えずに旭川に住む間しかできないこと、自分の好きなことをしています。

旭山動物園にも何度も遊びに行きました。関連の本を何冊も読みました。坂東さんのことは自分の子供に伝えたいです。(3・12)

今日は時間があつたので「論・旭山動物園」を読みました。菅野浩さんの文章がとても面白く良かったです。これ程の苦労の中で動物園ができた事を知りませんでした。

中保先生にもずいぶん分力を尽くしていただいたのですね。

私は俳句が趣味ですが、動物園に行くと楽しい俳句ができます。特に旭山動物園の動物は自由で楽しそうですから、見るのも嬉しい。俳句にすると、嬉しい句ができます。

何句かかきます。

ペンギンの真面目な散歩春うらら

ワイワイカバの百吉冬を翔ぶ

ガバツと口河馬冬帝を威嚇する

以前、飼育さんに河馬が口を開けるのは威嚇だと教わりました。あの飼育員さんのガイドは本当に面白くて大好き!

(2・22)



坂東さん講演

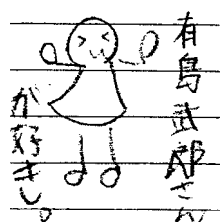
### 感想・その他

二度目の訪問(?)。たくさん資料をもらい、大満足。できれば、お話したい。文学について。だけど旭川の作家いっぱい知りたい。(2・27)

旭川で生まれ育ち、護国神社周辺と常磐公園は非常に懐かしく思い出されます。

昔、青少年科学館?と思いましたが、今は旭川文学資料館となっております。旭川ゆかりの文学者をこれほど知ることができる場所は素晴らしいと思います。

長く存続することを願います。(6・18)



初めて知った作家ですが、とても興味を持ちました。私小説的な作家だったのでしょか。生い立ちや出会いを物語りにしていくこと、大変なことだと思います。(6・29 M)

### 旭川文学資料館 開館十周年記念企画展

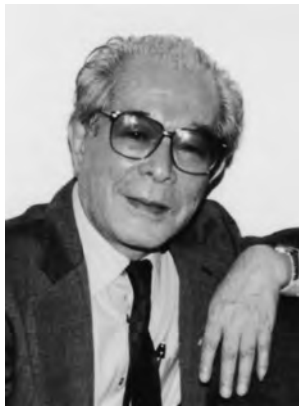
## 「旭川が生んだ異端の作家 八匠衆一展」について

令和元年六月十一日〜九月七日

沓澤 章 俊

今回の企画展では旭川生まれの作家、八匠衆一(本名 松尾一光)を取り上げることにいたしました。八匠は大正六(一九一七)年旭川生まれ。自宅は按摩・鍼灸・マッサージ治療を営んでいて、全盲の父嘉蔵が主に施療にあたっていました。母りきも半盲で、気性が荒く、八匠が子どもの頃から体罰を受けることも多々ありました。父の弟子四、五人の盲人達も同居していて、八匠は、一刻も早くこの家を出たかったと書いています。

昭和九(一九三四)年、旭川商業高校(現・旭川商業高等学校)卒業後、日大藝術学園



(現・日大芸術学部)に入学。男女共学で、自由な気風、講師陣には、当時現役の作家だった福田

清人や浅原六朗(童謡でるてる坊主の作詞者)、そして卒業後も八匠に影響を与えることになる伊藤整がいました。卒業後は東京の雑誌社で編集の仕事しながら生計を立て、昭和十九年応召(二度目)となり、千葉県千倉町(現・南房総市)で敗戦を迎えます。

敗戦直後の焼跡だらけの東京をさまよい歩き、これからどう生きていけるのか絶望していたとき、海軍から復員してきた梅崎春生と偶然電車の中で再会します。それから柿ノ木坂で梅崎ともう一人の友人と三人の同居生活が始まります。その頃梅崎は彼の出世作となる「桜島」の原稿を持っていました。それが江口榛一編集長の「素直」(赤坂書店発行)という雑誌に発表することに決まっております。その関係で梅崎と八匠は発行所の赤坂書店に勤務し、二人は競い合うように作品を執筆してゆきます。

戦後の混乱期、浮浪者が群がり集団スリが横行する中、八匠は自分や周りの状況に対する怒りのような感情から逃れるため、アルコールにおぼれたある夜、事件を起こしてしまっています。

それがきっかけで、妻となる坂東知子との出会いが、八匠の(作家)人生にとって決定的な意味を持ちます。聖女のような彼女との出会いと別れを描いた『地宴』『海潮音』『生命盡きる日』は、若い頃から八匠が私淑し家族ぐるみの付き合いがあった外村繁の『草筏』『筏』『花筏』と同じく、畢生の“三部作とな

っています。

また、八匠は、昭和三十(一九五五)年、名古屋の同人誌「作家」に作品「未決囚」を発表、これが直木賞候補になります。また昭和五十七(一九八二)年、『生命盡きる日』で平林たい子文学賞を受賞しています。

今回の企画展では、八匠衆一の未発表原稿約二千枚等を所蔵されていた甥御さんの松尾彰久様、奥様の松尾綾子様はじめ、外村繁の御子息晶様の妻 外村泰子様、八匠と親しかった小田嶽夫の研究小田大蔵様、旭川富貴堂本店で八匠のサイン会を開催した時の色紙を所蔵されていた菅原志郎様、梅崎春生の資料を所蔵している、かごしま近代文芸館様から貴重な資料を借用することができました。また、八匠作品の掲載誌を探すお手伝いをしてくださった旭川中央図書館資料調査室の方々、いつも共に展示作業にあたってくださる展示委員の皆様にも、この場を借りて心より感謝申し上げます。

尚、会期中、八月三日に講演会を予定しております。



## 同人誌紹介

## 青芽反射鏡

荻野久子

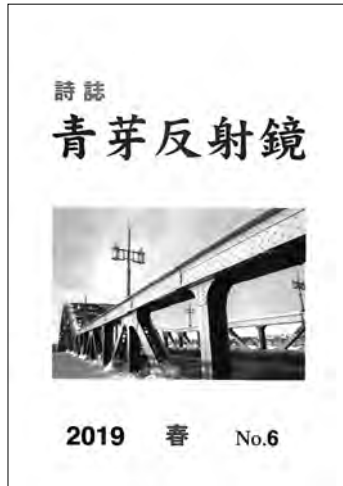
富田正一様主宰の「青芽」は一九四六(昭和二十一)年に発行され、二〇一八年七月、No.五七六号で終刊となりました。

私は中途の入会者で、右も左も無知のままでしたが、快く受け入れていただき、ご指導を頂いてまいりました。

七十二年間継続の「青芽」が終刊して、その後間もなく「青芽反射鏡」が手元に送られて来ました。富田様の詩に対する情熱には、心の底から脱帽致すところです。

「青芽反射鏡」は私にとりまして、生きることへの一つの心のよりどころとなっております。

現在は、同人の方々とは、面識のある方ない方、とさまざまですが、この誌上にて意識



のふれあいが深められてゆくことを嬉しく思っています。

一つの作品について、考えたり、書いてみたりする時、反射鏡に、私自身の内面、外面がどのように映し出されているのだろうか、希望と不安が交錯しています。お仲間の方々とも、いつの日かめぐり合える時が来て、交流の場を味わうことが出来たら幸いです。

現在、No.六号まで発行されました。この先どういう方向へ進んでゆくのでしょうか。未来へ向かい羽ばたいてゆく期待を、胸の中に大きく描いております。

富田正一様の熱意あるご指導のもとで、発表の場をいただいていることに、心より感謝の念を表すところです。



12月24日からの「歌誌『かぎろひ』65周年記念展」の短歌誌



井上靖記念館職員と友の会職員、ボランティアの親睦会  
2019.6.27 於：旭川市2-7「一幸」

初代 相川正志  
二代目 菅野 浩

## 二人の会長の思い出

東 延江

二人の会長の思い出を書こうとした時、私の脳裏に浮かぶのは、余りに多い思い出の数々だった。

旭川に旭川の文学資料を残したい。そのための場所もほしいという私の願いにお二人は手を挙げて賛同し、この旭川文学資料友の会の中心となって発足から現在まで支えてくださった。

相川正志元会長は、お父様の正義さんから始まって四十三年ものお付き合いだったが、たくさんの思い出を締めくくったのは亡くなられたその遺体と対面した時だった。

息子の正浩さんからの報せで何うと、対面したその顔はほほえんでいた。

正浩さんの人工呼吸を受け、六年前に亡くなられた愛妻良子さんのあのやさしい笑顔の出迎えを受けての旅立ちだったのではあるまいか。

菅野浩会長の奥さん叡子さんと私は同年でやはり四十年以上の付き合いで、彼女の自慢が夫の浩さんであり、いつの間にか私たちも「浩さん」と気安く呼ぶようになった。

その叡子さんが亡くなった当座、勤務の終わったあと、彼女のいない家に帰るのがつらく、よく美瑛の丘へ車を走らせ風景を眺めていたと、第二十一回の小熊賞受賞者加藤文男夫人邦子さんを美瑛の丘に案内した時、自分が心を癒した場所に着くときしみじみと語っていたのが、昨日のように思い出される。ガンと闘い、歩くのがつらくなっても資料館に顔を出してくれていたその意志の強さ、

### 写真にみる相川・菅野両会長の面影を追って



旭川文学資料研究会 設立会  
2001.4.22 於：花月会館  
相川正志

札幌から息子さんが迎えに来た時は歩くのもやっとだったという。  
元氣印の叡子さんが「浩さん、よくがんばったね、もういい、さあ私と一緒に行くよ」と連れて行ったに違いない。お二人の愛妻は夫と今何を語り合っているだろうか。笑い声が聴こえるような気がする。



旭川文学資料研究会 発起人会  
2001.3.11 於：旭川市民文化会館 第一会議室  
左より 坂井京子、氏家正実、菅野浩、木村隆、森内伝、澤栗修二



旭川文学資料友の会 創立10周年  
NPO 設立記念の集い  
2011.8.28 於：ターミナルホテル  
前列左より8人目 相川正志、その右後方 菅野浩、石山宗晏



旭川文学資料調査室のボランティア 小樽文学散歩  
2004.10.1 小林多喜二文学碑の前で  
前列右端 相川正志



第1回旭川文学資料展 最終日の会員たち  
前列左より 石山宗晏、菅野浩、富田正一  
佐竹昭夫、佐藤比左良



スタンプラリー 2 / 9 ~ 10



北大大学院留学生 チェルシー・ハドソン  
アイヌの文献を求めて来館した

# 有島武郎と『松むし』

—その二—

片山礼子

有島安子『松むし』では、夏の部分が欠落となつている。七十一首の中でも季節でいえば春を詠んだ短歌はあるが、夏についてはほとんど見あたらない。しかし、色彩を意識した短歌に出会うのである。色彩でいえば、

白、紫などをイメージするものが多い。生前、有島安子は、「松むし草」を好んでいたということからも、こうした一連の色彩が多く詠まれることもうなずける。だが、視点を変えらるならば、ここで同時期を生きた与謝野鉄幹、晶子の存在を見逃すわけにはいかない。有島武郎の代表作『或る女』の中で、鳳晶子と与謝野晶子と思われる人物が登場する。

「明星」で発表された鉄幹や晶子の短歌からの影響が全く無いとは言いがたい。おそらく、同時代における、与謝野鉄幹、晶子の主宰する『明星』からの影響は非常に大きい。

今号はそうした色彩に関しての短歌についてご紹介をしたいと思う。

武郎は軽井沢で古今の短歌、俳句、漢詩を引き写している。ここでは、芭蕉をはじめ、一茶や子規の歌(注一)など。他にも有島武郎自身の同時代の文士たちからの影響の中で

も与謝野鉄幹主催の雑誌『明星』、与謝野晶子の数々の短歌から刺激を受けたであろう。

明治三十四年に発表された晶子の『みだれ髪』には「白百合」、「春」、「神」のキーワードとした短歌が詠まれている。

ここで、色彩を意識した安子の短歌を紹介してみる。

- ・紫の飛白の甲斐絹しろうらの夜着きて春をやむ乙女かな
- ・紫の夜よりさめて世はしばしあさの化粧のうつくしきかな
- ・むかし見しはかなき夢の行方にも似てあはれなり朝顔の花
- ・夏祭村の乙女等うちつどひ遊ぶがごとく紅野薔薇咲く
- ・秋は来ぬ山の木の実に野の花に夕べの雲のさびしき色に
- ・病院の松原をゆく看護婦の白衣に小雨ふる夕べかな

このように、「松むし」には、色彩、それも白、紫、紅などの色調のものが多く詠まれていることも特徴の一つとしてあげられよう。

そのことは、先にあげた武郎の詩歌への造詣の深さや、同時代文学からの影響に加え、武郎自身が絵を描いていた事実も見落とせない。

入院して間もない妻、安子に送った葉書(大正四年二月十日付)に詠まれた武郎の短歌「夕日がさやかににほふ海原に白い小さい帆

が消えて行く」等にもみる武郎の色彩への思い入れが投影しているともいえるのではないか。

(注一)

- ・吹き飛ばす石も浅間の野分かな 芭蕉
- ・長閑さや浅間の煙屋の月 一茶
- ・見上れば信濃につく若葉かな 子規



有島安子が好きだったという松虫草



明星創刊号 大正10年11月1日発行

## エッセイ

## 偶然の啄木

浮 穴 み み

旅に波瀾はつきものである。そして波瀾は時に、思いがけない偶然を運んでくれる。

昨秋、所用で旭川を訪れた。折角だから、と層雲峡まで足を延ばすことにした。

仕事を終え、夫と合流して、市内から旭川駅へと向かった。層雲峡への送迎バスが駅前から出ている、と聞いていたからである。

ところが、いくら探しても、それらしいバス発着所が見当たらない。西側のシヨツピングモール辺りを右往左往していると、通りがかりの中年女性が、東口の観光案内所で聞けばいい、と教えてくれた。私たちは、昔とは見違えるほど広々とした旭川駅前広場を、西の端から東の端まで、はるばる歩いて、やっと件の案内所にたどり着いた。

バス発着所の位置を尋ねる私たちに、係の女性はにこやかに

「ああ、それなら、こちら」

と地図に赤い丸をつけてくれた。なんとそこは、つい今しがた後にしたばかりのモールの更に西側。東奔西走とは、このことである。

いささかうんざりしたが、兎も角、一件落着。時計を見ると、出発時刻にはまだ少し間があった。長旅に備え化粧室を探して、私たちはまた更に、東の奥へと入っていった。

私が化粧室から出てくると、夫が妙に嬉しそうに手招きをした。何事かと駆け寄ると、

「ほら見て」

と指を差す。そこには、石川啄木の像と歌碑があった。

「えっ、こんなところに……」

失礼ながら、このような東の果てに啄木像があったとは、露とも知らなかった。

「ここ、読んでご覧」

夫の示すレリーフを見ると、啄木は一九〇八年(明治四十一年)一月二十日、旭川駅で下車、停車場前の宮越屋旅店に一泊、と書いてある。夫が重ねて言う。

「ここだよ、僕のおふくろの生まれたのは」

「じゃ、宮越屋……」

「いや、違う。でも、ここなんだ。もつとも、大島屋の時代だけ……」

彼の母親は、大島屋という旅館の娘だった。

どういう経緯かはわからないが、明治の終わりに、大島屋が店をたたんだ後、同じ場所で宮越屋が旅館を開業したという。

往年の旭川駅前旅館として、宮越屋と三浦屋の二つの名前は、よく挙がるが、残念ながら、大島屋の名は忘れ去られて久しい。

「これが、大島屋だったら、おふくろも啄木に会っていたかもしれない」

「啄木は、お母様の歌を作ったかもね」

私たちは、ちよつと口惜し気に、綺羅らかなレリーフを見上げた。

「でも、迷ったおかげで、面白いものを見つけたな」

「お母様が呼んだのかしら」

道に迷って思わぬ場所にたどり着く、こんな偶然も、いいものである。そこには、思いもかけない物語の種が落ちている。

了

プロフィール



一九六八年旭川市生まれ。千葉大学文学部仏文課程卒。二〇一八年、「鳳凰の船」(双葉社)で「第七回歴史時代作家クラブ賞・作品賞」受賞。近著「秘めおくべし」(中公文庫)。札幌市在住。



# 懐の深い街

柴田三吉

このたび第五二回小熊秀雄賞をいただき、はじめて旭川を訪れた。というより、私は北海道に渡るのははじめてだった。飛行機が津軽海峡を超えるあたりから、眼下の地形を頭の中の地図と参照しながら楽しく眺めていた。やがて右手に見えてきた大雪山系の稜線にはまだ雪が残っていて、その手前の大地は緩やかにうねり、パッチワークのような畑地が広がっていたのだった。

東京は数日前から三〇度近い暑さが続いていたが、この日の旭川は寒波が張り出すとの予報で、冬用のダウンジャケットを用意していった。それでも空港から一步出た途端、セーターも入れてくるべきだったと思わせる冷気に見舞われた。迎えにきていただいた「あさひかわ新聞」工藤氏のおかげで早々に会場入りできたのは幸いだった。

贈呈式では、市民実行委員会の方々の温かい心に包まれた。また、この地で詩を書いてる詩人たちとお会いし、貴重な話を聞くことができたことも大きな喜びだった。小熊秀雄が旭川でどれほど愛されているかを実感した一時であると同時に、これほどの熱意をもって運営されている賞をいただいた責任も強く感じたのだった。

翌日は気温も少し上がり、市民実行委員会

の坂井勝さんに市内の文化施設を案内していただいた。その際、贈呈式に参加してくれた友人二人も同行させていただいた。帰りの便までの時間を有効に使うため、坂井さんは綿密な計画を立ててくれていた。

まずは、詩集『旅の文法』を置いていただいた「こども富貴堂」さん、そして「旭川文学資料館」「河村力子トアイヌ記念館」「旭川市彫刻美術館」「三浦綾子記念文学館」という順路で、どの場所も興味深く、旭川の歴史や文化を知る格好の機会となった。

文学資料館は休館日に当たっていたが、東延江さん、十河宣洋さん、香澤章俊さんが迎えてくれ、館内を案内していただいた。学芸員の香澤さんによるレクチャーに助けられながら、充実した展示を見てまわった。とりわけ小熊の貴重な詩集、書簡、絵などはここでしか触れることのできない資料で、目に嬉しいうものばかりだった。小熊が愛用していたという文机の大きさにも驚かされた。使い込まれてかなり角が擦り減っているが、この前に座って原稿を書いていた、在りし日の小熊を思い描くことができたのだった。

ある文  
学者の仕  
事を記録  
し、継承



授賞式の翌日来館した柴田氏

していくことは、その仕事の意味を編み直し、味わい直していくことだろう。この社会の危機が深まっているいま、小熊が示した抵抗の姿勢は私たちに大きな勇気を与えてくれる。芸術の力によって生の隘路を切り拓くこと。そこに時代を超えた共通性があるからだ。

限られた時間のなか、すべてをじっくり味わうことができず心残りだったが、機会をつくってぜひ再訪したいと思った。旭川とはそうした懐の深さを持った街である。

## 作品鈔

### 短歌

波の花

斎藤嶺也(コスモス)

この宇宙の希有なる地球に繁殖す畏れを知らぬホモ・サピエンス

雪を抱く北風も陽も野良猫も出入り自由の古き我が家

わだつみの荒れたる暮れの留萌路は吹雪のごとく波花の立つ

初詣で年ごとに増す願ひごと気弱き年齢になりけるかも

一年を守り賜ひし神札はどんだの煙に乗りて還りぬ

# 資料館だより

## 受贈資料(敬称略)

(二〇一八・十二〜二〇一九・六)

・前田 和恵 高橋和光色紙、高橋和光歌集『呼子鳥』

・中村 洋一 歌誌「原始林」一九九六年〜二〇〇一年発行

・岡和田 晃 岡和田晃著『骨踊り 向井豊昭小説選』、「ナイトランド・クオータリー」No.17

・東 延江 萩原貢詩集『ケサランパサラ』、「東延江編『旭川詩誌』情緒」誌上に書かれた小熊秀雄について」他

・旭川工業高校 『しゃべり捲くれ〜時代を超越する詩人〜』DVD(北海道映像コンテスト2018)で学生部門最優秀賞、「全映協グランプリ二〇一八」第38回『地方の時代』映像祭

・加藤 克己 「美術旭川」創刊号から全冊

・三原 一仁 山口敬子詩集『風花』、加藤千恵歌集『ハッピーアイスクリーム』他

・横川 敏晃 石井昌光詩集『冬に向かう池』他

・歌集を読む会 歌集を読む会メンバー直筆色紙計二十枚

・百井 昌男 学校文集(大有小、北星中、北高)

・富田 正一 詩誌「青芽反射鏡」一〜六号

・柴田 三吉 本人写真・略歴。第五十二回小熊秀雄賞受賞詩集『旅の文法』直筆原稿他

・下村 朔郎 「週刊新潮」合本

・柴田 望 詩誌「フラジャイル」四、五号

・鈴木 紘一 昭和二十年代発行の児童書他

その他、佐藤比左良、十河宣洋、高橋絹代、堤静波、宮崎恒子、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんのお寄せを受けました。心よりお礼申し上げます。

の各学生部門で優秀賞を受賞

訂正とお詫び

22号3ページ

西本一都句碑と大塚千々二句碑

の写真が入れ替わっていました。

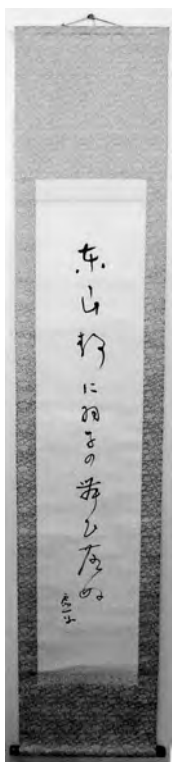
22号10ページ上段

誤 上林猷史

正 上林猷夫

訂正してお詫びします。

東山静かに羽子の舞ひ落ちぬ 虚子



川村暮秋さん寄贈の  
高浜虚子の掛け軸(真跡)

## 謹 悼

旭川文学資料友の会 片山 晴夫 理事が、令和元年六月十二日逝去されました。茲に謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

旭川文学資料友の会

## 会員を募集しています

この会は会員の皆様の会費で運営されています。知人友人などで、会員になつて協力していただける方をご紹介します。ご協力ください。

会費 個人会員 二千元

法人会員 一口 一万円

協賛金(任意)

ゆうちょ 口座記号

273019

加入者名 特定非営利活動法人

旭川文学資料友の会

98397

## 編集後記

初夏の天候が怪しい。猛暑と思つたらセーターを欲しいくらいの寒さ。自然現象だから致し方がないが、体には良くない。常磐公園を散歩すると、四阿に年配の方が涼んでいることが多い。先日池の子鴨に餌をやっているのを見かけた。パン屑であるが鴨が寄ってくる。池の中の小魚も寄ってきて楽しそうである。楽しい風景である。久しぶりに気持ちのんびりした。(宣洋)